

香取市大根磯花（上谷津）遺跡出土の中期前葉の異系統土器

上 守 秀 明

はじめに

筆者は2004年度に旧資料課に配属となり、多岐にわたる課業務の一つとして、発掘調査報告書刊行後に出土品を県教育委員会に移管するために行う整理作業に携わったことがある。その際、当財団で仮保管していた大量の出土品の中に、一般調査受託事業による記録保存成果ではないため、千葉県教育委員会への移管対象にならない寄託者不明等の遺物が存在することが分かった。

今回紹介する出土品は、袋詰めされた出土品中に手書きで佐原市上谷津遺跡と遺跡名のみを記載した紙片が同封された、整理箱2箱分の土器・土製品・石器類の中から、図化可能なものを抽出したものである。これらはいつ、どんな経緯で当財団に持ち込まれたのかなど、紙片に記載された遺跡名以外の情報は、各方面に当たってはみたものの、それ以上の情報を得ることはできなかった。そのような来歴の不確かな出土品ではあるが、これらの中には千葉県では類例が少ない中期前葉の南東北・北関東地域系統の稀有な土器が含まれていることから、この資料については類例を検索し、若干の考察を加えて公表することとした。

1 遺跡の概要

遺物を発見した当時、筆者は佐原市（現香取市）上谷津遺跡とはどのような遺跡なのか、まったく知見がなかった。そこで、千葉県教育委員会が1986年に発行した「千葉県埋蔵文化財分布地図（2）-千葉県・香取・海上・匝瑳・山武地区」（以下、千葉県分布地図（2））で調べたところ、佐原市遺跡番号113の内容に佐原市大根字磯花に所在する縄文時代中後期、古墳時代後期、平安時代の集落跡である上谷津遺跡として記載されていることと、遺跡の異名称として括弧書きで磯花遺跡と記載されていることが分かった^(注1)。そして、この記載は1979年3月1日に佐原市教育委員会が発行した「千葉県佐原市埋蔵文化財分布地図-史跡・名勝・天然記念物および埋蔵文化財包蔵地所在地図」（以下、



第1図 遺跡の位置 (●)

佐原市所在地図) 中の上谷津包蔵地の記載に基づいていることまでは、認識することができていた。

遺跡は香取市西部の古鬼怒湾水系にあり、現在の利根川の支流である香西川の水源部付近の標高約37mの台地上に位置している。遺跡の東西に香西川の支流が入り込んでおり、南北約700m×東西約500mの規模を有するが、現在は後述する土砂採取事業に伴う発掘調査後、台地の大部分が削平され往時の面影はとどめていない。なお、この台地の約1km南には太平洋に注ぐ栗山川との分水嶺が所在している（第1図）。

今回の起稿にあたり、改めて大根磯花遺跡（上谷津遺跡）の埋蔵文化財包蔵地としての周知歴と、主な調査歴を辿ることとした^(注2)。

文化庁文化財保護部が1974年4月30日に発行した「全国遺跡地図 12千葉県」には、上谷津遺跡あるいは大根磯花遺跡の記載はない。近辺の縄文遺跡では当遺跡北東の大根字金田に所在する金田貝塚・坊台遺跡、同じく辺田に所在する辺田貝塚・弥宜録貝塚というように、研究史上早くから貝塚研究者等に知られ、所在地図・地名表が作成されていた貝塚を中心とした記載に絞られており、この時点では周知化されていない。千葉県教育委員会が継続的に発行している「千葉県埋蔵文化財発掘調査抄報 昭和50（その2）・51年度」（1978年3月31日発行）によれば、磯花遺跡として1976年4月に土砂採取に伴い、遺跡調査団により1,000㎡が発掘調査され、時期不明遺構3基が検出されている。大根磯花遺跡としての記載の初出である。そして既述したように「佐原市所在地図」では上谷津包蔵地と記載されているものの、1976年の発掘調査の届出では磯花遺跡として提出されていることや、遺跡の字名を考慮したためか「千葉県埋蔵文化財分布地図（2）」では磯花遺跡を括弧書きで添えている。

遺跡の調査歴については、県内の主要遺跡を紹介した『千葉県の歴史 資料編 考古1』の大根磯花遺跡の項で、青木 司氏が一覧表としてまとめている。これによれば、1996年までに土砂採取事業に先行した確認調査と本調査が計16回行われている^(注3)。これらの成果により、広範な台地の西側には中期前葉から後葉期の環状集落が、また、東側には中期後葉から後期前葉期の環状集落が形成されていたことが分かっている。

2 出土遺物

①土器（第2図1～第3図30・第5図）

31点を抽出し図示した。第2図1～5は前期の土器である。1は黒浜式で胎土中に繊維を含む。頸部に近い部位で、横位のRLが施される。2～5は浮島式で、いずれも半截竹管による平行沈線文で胴部文様が描出される。

第5図・第2図6～10は中期の土器である。第5図は中期前葉に比定できる異系統の土器である。詳細は後述する。第2図6は太い沈線文で省略して描出された口縁部の楕円区画文に、同様な沈線による蕨手状のモチーフが貫入する。7は沈線で作出された口縁部無文帯以下に、縦位の沈線が連続的に充填される楕円区画文が認められよう。いずれも加曾利EⅡ式新段階～EⅢ式古段階に比定されよう。8は垂下する無文の帯状部を作出する微隆起線上まで縦位のLRが施される。

加曾利EⅣ式新段階に比定される。9は櫛歯状工具による条線が斜位に施される。10は鉢形あるいは壺形土器に付される把手と思われる。いずれも加曾利EⅡ式～Ⅳ式に比定されよう。

第2図11～21・第3図22～30は後期の土器である。11は称名寺Ⅰ式で、沈線による意匠文内外に横位のRLが施される。12は綱取式系の突起で沈線文と円孔文が施される。13・14は称名寺Ⅱ式で、沈線による意匠文内に列点文が充填される。15～29は堀之内Ⅰ式である。15は沈線により大柄で鋭角な斜格子文が施される。16は口縁端部に凹線が巡る。円形刺突文が伴う緩やかな二山の波頂部から複列の沈線文が垂下する。17は基幹となる複列の縦位沈線文から複列の横位沈線文が延びる。18は重圏する沈線文により基幹線と大柄な文様モチーフが描出される。19は縦横に施された地文LR上に、沈線による蕨手状モチーフが描出されよう。20は横位のLRによる地文上に、やや間隔をあけて平行沈線文が縦位に施される。21は横位のLが施される地文上に、平行沈線による集合沈線文が施される。22は横位のRLが施される地文上に、太い沈線文により曲線的な文様モチーフが施される。23～26は口縁端部から撚糸文あるいは縄文が施されるもので、23は斜位の撚糸文L、24～26は横位のLRが施される。27～29は縄文が施される胴部で、27は横位のL、28は縦横にRL、29は横位にLRが施される。30は後期前半期に比定される無文の口縁部である。

これらのうち、前期及び中期前半に比定される土器は大根磯花遺跡としては初出であるが、中期後半加曾利EⅡ式～後期前半堀之内Ⅰ式については、土砂採取に伴う過去の調査において出土している内容にほぼ一致している。

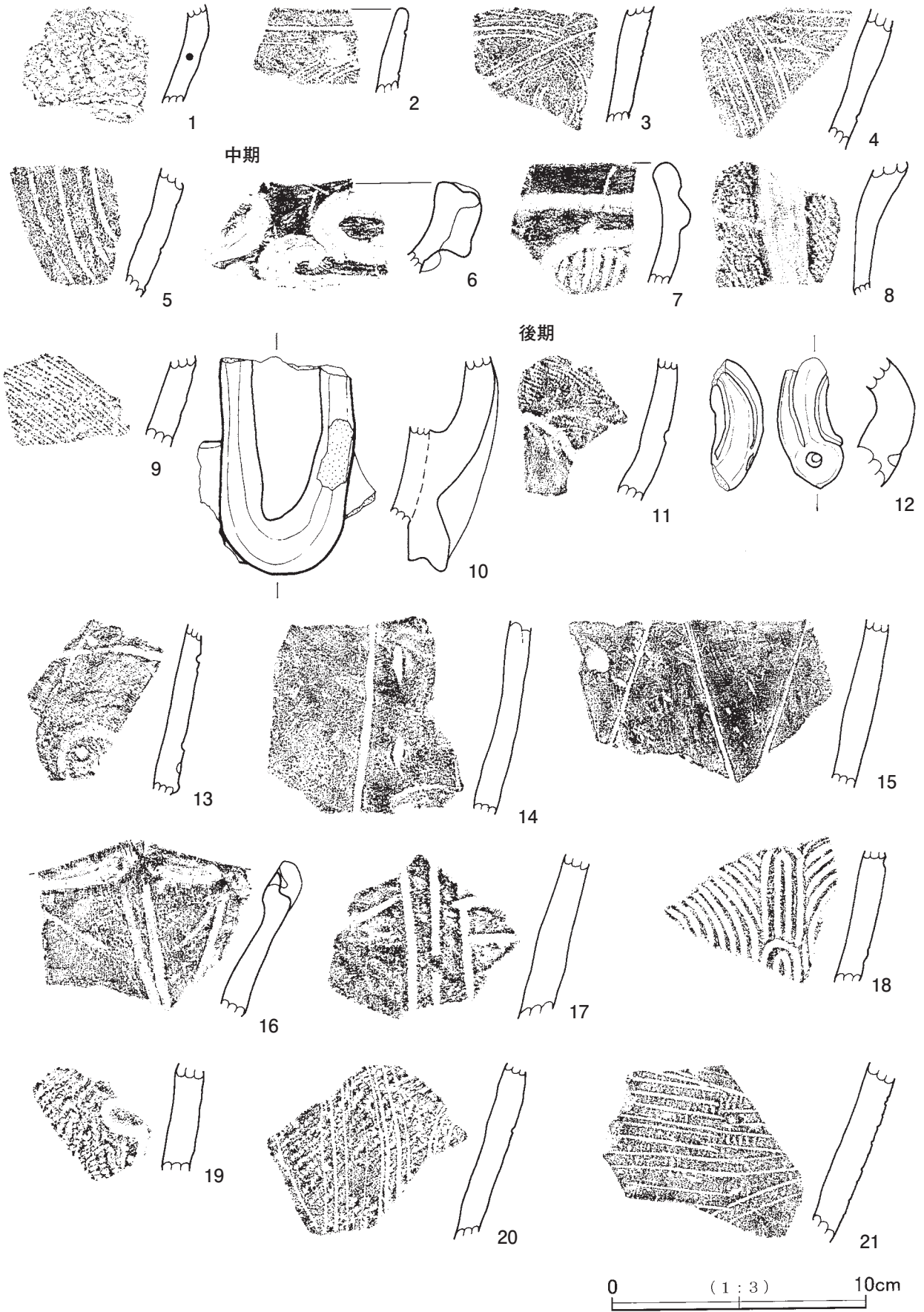
②土器片錘（第3図31）

口縁部無文帯を微隆起線で作出した加曾利EⅣ式の土器片を再利用したものが1点ある。口縁端部側に切れ目が作出されていないことから、未製品であろう。

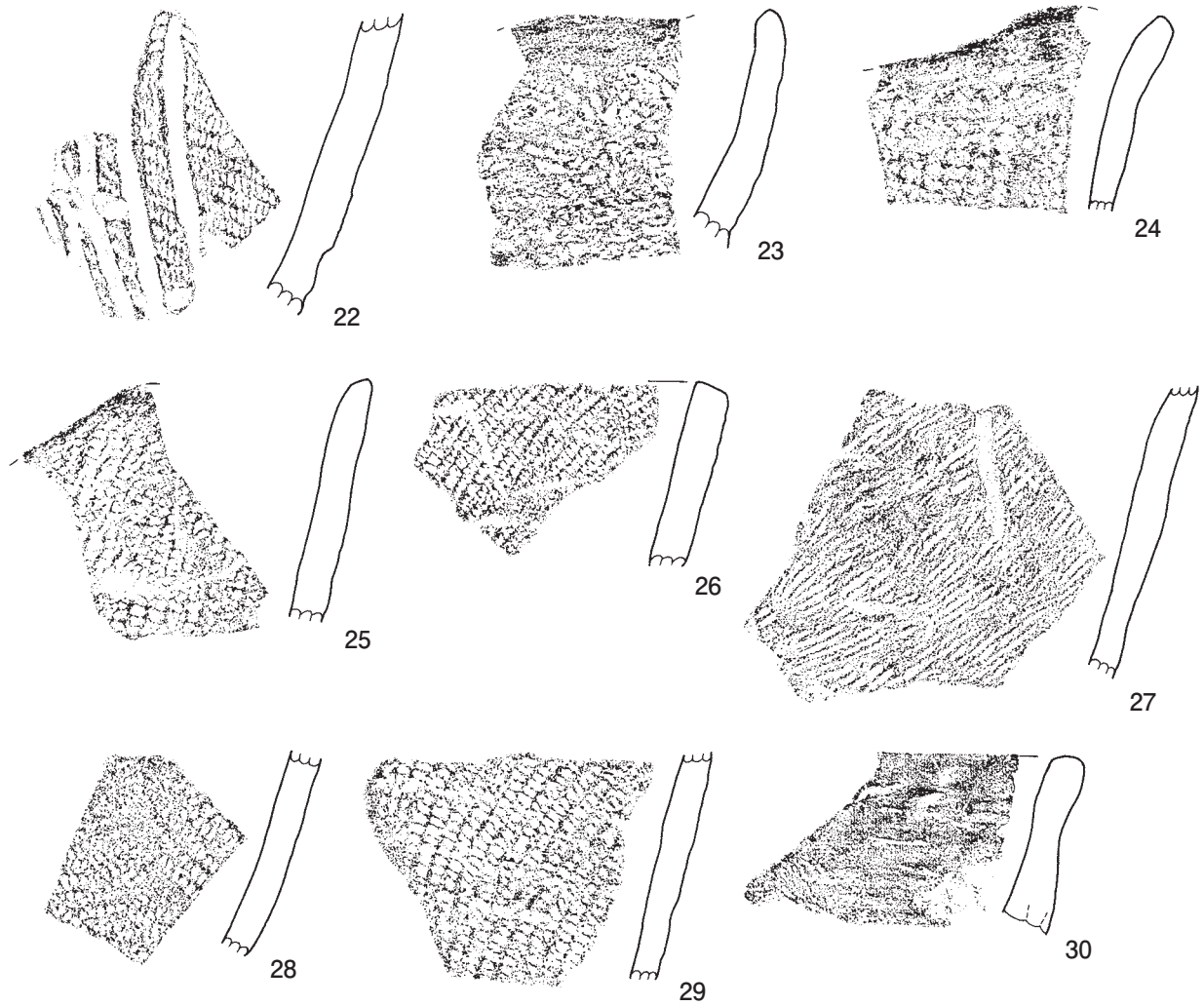
③石器（第4図1～8）

8点を抽出し図示した。1・2は蛇紋岩類製の磨製石斧である。1は定角式の磨製石斧の基部である。刃部を大きく欠損しており、現存部は全体の約1/3と推定され、重量88.0gを測る。2は同じく定角式の磨製石斧の刃部である。緩やかな弧状を呈する刃部には、破損と修復が繰り返された痕跡が看取される。また、裏面の凹部は着柄のための痕跡と思われる。重量166.8gを測る。

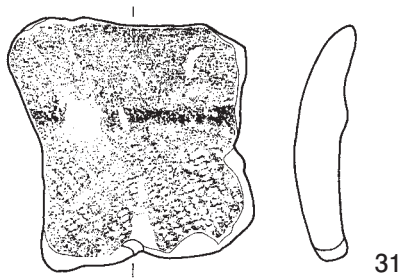
土器 前期



第2図 出土遺物 1



土器片錘

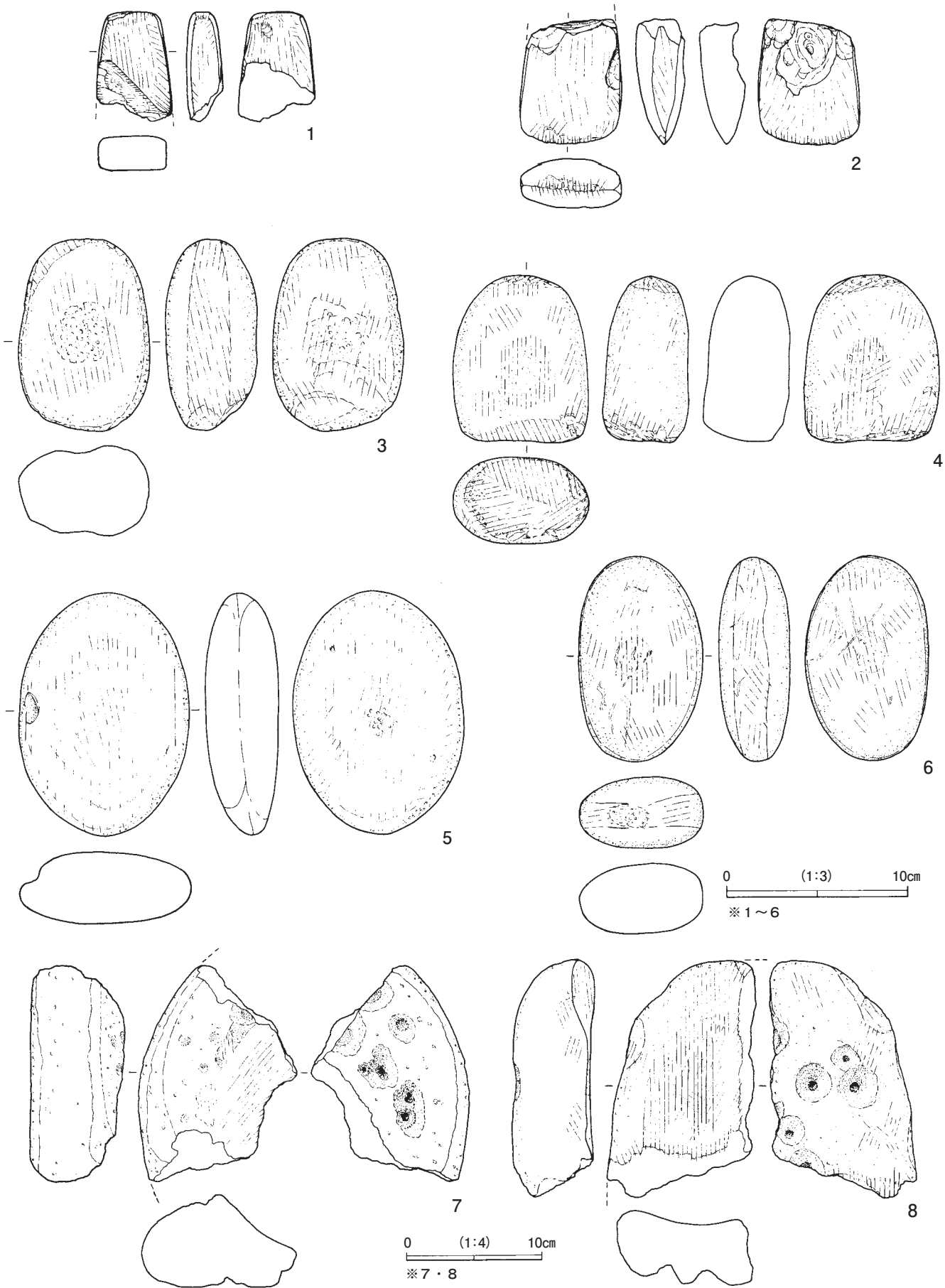


0 (1:3) 10cm

第3図 出土遺物2

3～6は磨石類である。3は表裏及び側面に摩耗痕が、表裏の中央部に凹み痕が、下部には弱い敲打痕がそれぞれ看取される。角張った黒色の結晶を含む安山岩製で、重量559.7gを測る。4は上下部ともに摩耗痕が看取されるが、下部が顕著である。上部に2方向、下部に3方向からなる磨面が構成されており、スタン

プ形を呈す。表裏の平坦面にはごく弱い凹みが看取される。硬砂岩製で、重量529.2gを測る。5は器面全体に微光沢が認められ、滑らかな手触り感があるものの、裏面中央部のみにざらつきが感じられる。緑白色の石英斑岩製で、重量745.0gを測る。6は表裏及び両側面に摩耗痕が看取される。表裏中央部と端部に若



第4図 出土遺物3

干ざらつきが感じられが、器形に影響するものではない。砂岩製で、重量468.3gを測る。

7・8は多孔質安山岩製の石皿片で、推定される完形時の平面形状は楕円形である。7の残存部は全体の約1/5~1/6程度と考えられる。周縁が明確な挿鉢状を呈していたと推察され、裏面には凹みが6か所看取され、重量1,165.0gを測る。8は7に比べ周縁部が低いつくりである。分割後も引き続き石皿として使用されたと見られ、上下方向の磨り痕が、完形時には多方向だった磨り痕を消している。裏面の凹みは7か所以上認められるが、このうち少なくとも3か所は分割後のものと考えられる。重量1,250.0gを測る。

今回紹介した石器の器種は、過去の調査において出土している内容の範疇にある。

3 中期前葉の異系統土器について

ここでは、第5図に示した中期前葉土器について説明を加えたうえで類例を検索し、この土器の位置付けを検討しておきたい。

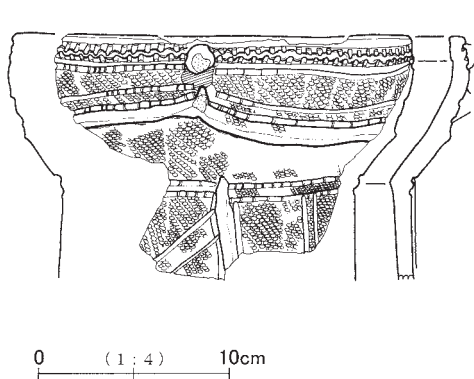
器形は頸部と胴部を境に、口縁部は端部に向かって緩く湾曲しながら開く。胴部は残存部の範囲では中位に向かって弱く開きながら、以下では底部に向かって径を小さくすると推察する。口縁部から胴部まで、地文には縦位の単節LRが施される。口縁部は端部が無文となり、以下に交互刺突文と断面三角形の隆起線文によって区画された文様帯を形成する。上部を欠損するが、区画の接点には突起が付されている。交互刺突文には1条の、隆起線文には2条の結節沈線文がそれぞれ付随するが、押し引かず沈線となる部分が認められる。頸部は地文のみの素文であり、縄文施文後にナデ消されている箇所が多い。胴部上位には頸部と区画する2条の結節沈線（有節沈線）文が横位に展開し、この区画線から両側に沈線が付随する断面三角形の隆

起線による懸垂文（懸垂隆帯）が垂下する。懸垂文の内部には2条の沈線が斜位、または縦位に施される。推定口径21.4cm、現高は12.9cm、器厚は0.7~1.2cmを測る。焼成は良好で、胎土中に雲母粒を主とした砂粒を多く含むが、器面調整が丁寧であるため表面には目立たない。

以上のように詳述した本土器の特徴を要約すれば、地文に縄文を施し、交互刺突文、結節沈線文（一部沈線化）、隆起線文で構成される口縁部、素文の頸部、懸垂文間（懸垂隆帯）に沈線によるモチーフを描出する胴部というように、3つの文様帯によって構成されることにある。この構成は、千葉県が所在する東関東地域の中期前葉期の土器型式である阿玉台式には該当せず、阿玉台式と併行関係にある大木7b式期における南東北・北関東系該期土器に類似性が求められるものである。

千葉県内においては南東北・北関東系該期土器の類例は少ないが、代表例として酒々井町墨古沢遺跡例が挙げられる（第6図1a・1b）。この土器の特徴を述べると、口縁部には結節沈線文が付随する幅狭な区画文が形成される。区画文は端部に付される突起、小波状縁、小区画文によって分割されており、橋状となる突起には内向きの顔面突起が付される。頸部以下の地文には縦位の単節LRが施される。頸部は素文とならず、上下端に波状沈線文が施される。また、縦位の分割線上には沈線により又状あるいはV字状のモチーフが描出される。胴部は2本の沈線と1本の波状沈線により区画され、縄文が施される隆起線による懸垂文が分割線上に垂下する。懸垂文間には沈線により、変形したX字状あるいは弧線状のモチーフが描出される。この土器は異なる部分もあるが、基本的には大根磯花例と同じく3つの文様帯によって構成される^(注4)。

塚本師也氏は長年にわたり栃木・茨城両県を主とし、



第5図 出土遺物4（中期前葉土器）

福島県・新潟県域の土器群も視野に入れて中期土器研究を行っているが、その中で阿玉台式と併行関係にある大木7b式期における南東北・北関東系該期土器についても、多くの業績をのこしている。

1970年代後半から1980年代前半には、茨城県日立市諏訪遺跡、福島県石川町七郎内C遺跡と該期の重要な遺跡の発掘調査が行われ、その成果をもとに大木7b式期における地域的な土器様相についての研究がなされ、地文縄文に結節沈線文を施す土器について鈴木裕芳氏の「スワタイプ」、海老沢稔氏の「諏訪式」、松本茂氏の「七郎内Ⅱ群土器」が提唱された。

塚本氏は1990年代当初、この種の土器群について海老沢氏の「諏訪式」を補強・発展させ、五領ヶ台式直後の土器（雷7類の一部、竹ノ下式）からの系譜で、阿玉台式期まで存続することを指摘したが、栃木・茨城両県の北半部及び福島県南半部について「七郎内Ⅱ群土器」を土器組成に組み入れた地域として一括して扱う立場から、この種の土器を「七郎内Ⅱ群土器」と総称して論じてきた。

しかしながら、2000年代当初、茨城県北部の茨城町宮後遺跡の資料が公表されるとその土器群を分析し、所謂「スワタイプ」を「七郎内Ⅱ群土器」から分離して「宮後タイプ大木7b式土器」（以下、「宮後タイプ」）と仮称した。また、「七郎内Ⅱ群土器」の分布域が福島県中通り地方と栃木県北半部を中心とし、「宮後タイプ」は茨城県北半部を中心とするが、両者の分布域は重複する部分があったとした。その詳細は2003年と2009年に氏が発表した論文に示されたとおりであるが、ここでは氏が示した「七郎内Ⅱ群土器」と「宮後タイプ」の共通点と相違点について、概要を記しておく。

- ① 体部上端で括れ、内彎気味の口頸部が付く深鉢形の器形は共通するが、球形の口頸部が付く深鉢は「七郎内Ⅱ群土器」に特徴的で、口頸部が算盤玉状に屈曲する深鉢は「宮後タイプ」に特徴的である。また、樽型の器形は今のところ「宮後タイプ」では出土例が知られていない。
- ② 口縁部、頸部、体部の3つの施文域に区分することは両者に共通するが、以下の③～⑤で記した細部で相違がある。
- ③ 口縁部の施文域は「七郎内Ⅱ群土器」では上部に押し上げられ、「宮後タイプ」では上部に押し上げられるものと、やや幅広く区画文を配すものがある。「七郎内Ⅱ群土器」にも区画文を持つ土器があるが、比較的幅狭なものが多い。

④ 頸部は「七郎内Ⅱ群土器」では施文域にモチーフを描くが、「宮後タイプ」では文様を施さないことが多い。「宮後タイプ」は口縁部にやや幅広い楕円形区画文を配し、頸部を素文とするなど、むしろ阿玉台式との共通性がうかがえる。

⑤ 体部上位は懸垂文を連繋する沈線や有節沈線を施す点で共通するが、「七郎内Ⅱ群土器」の体部文様は懸垂文間を崩れた弧状文や渦巻文で連繋し、「宮後タイプ」では懸垂文間をX字状、対弧状のモチーフで連繋している。

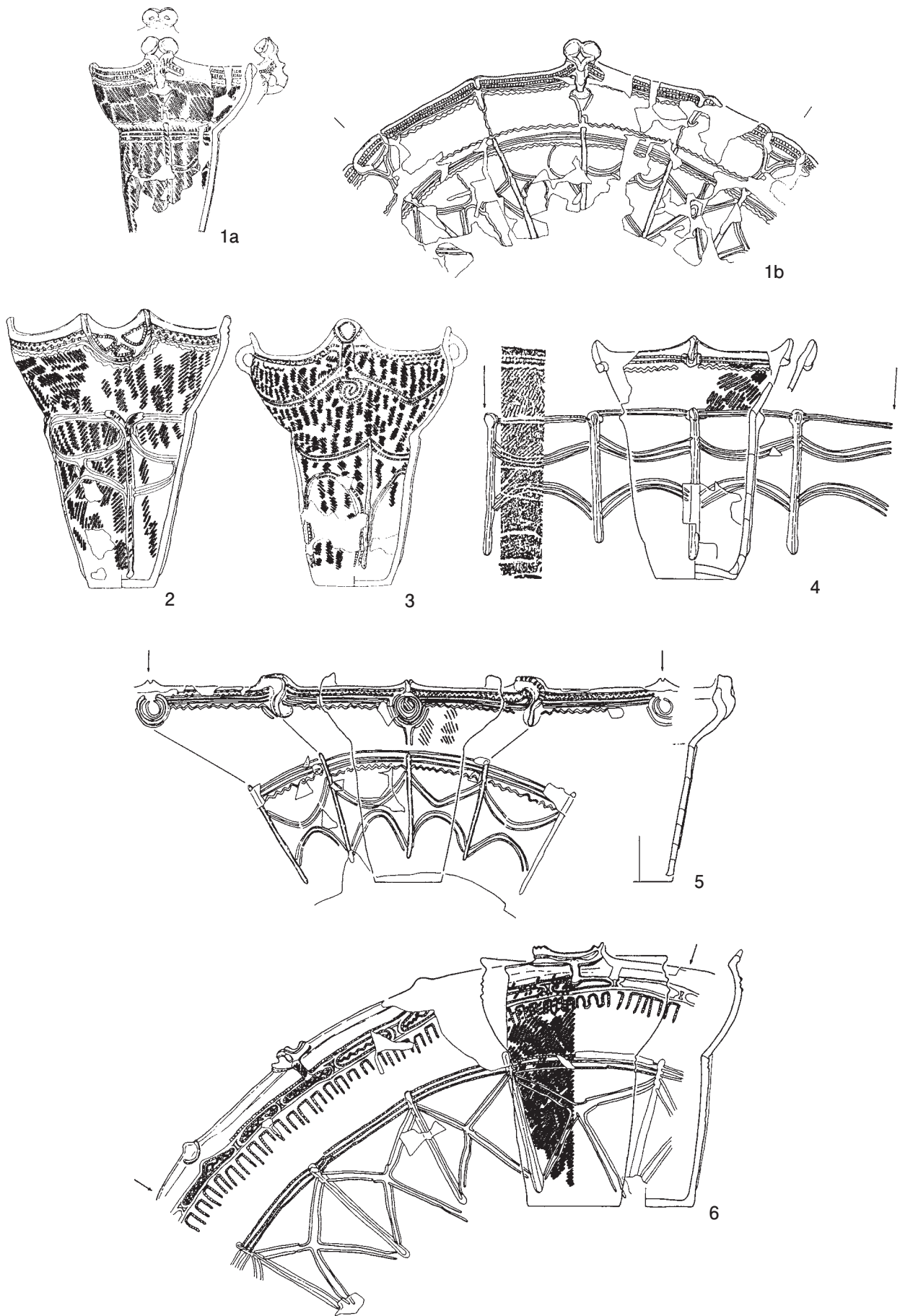
⑥ 文様は「七郎内Ⅱ群土器」では主に細い隆帯や有節沈線で表出され、沈線や原体圧痕も併用される。「宮後タイプ」では口縁部の区画文と体部の懸垂文以外は、ほとんど沈線で表出され、少数ながら交互刺突文や有節沈線文もみられる。

⑦ ともに地文として単節斜縄文を施すこと、特に縦位に間隔をあけて施文するものが多いことは共通する。

塚本氏が示した以上の諸特徴に大根磯花例を照合させると、交互刺突文、結節沈線（有節沈線）文、隆起線文による幅広い区画文を有す点、頸部が素文である点、体部の懸垂文間に沈線によるX字状のモチーフを描出すると推定できる点、懸垂文の上部を結節沈線文により連繋させる点などにより、「七郎内Ⅱ群土器」の文様描出技法を用いた「宮後タイプ」であり、その分布域から搬入されたものと推察される。なお、墨古沢例は胴部懸垂文間のモチーフに「宮後タイプ」の要素はあるものの、やはり口縁部の顔面突起や幅狭な区画帯により「七郎内Ⅱ群土器」の範疇におくべきかと考える^(注5)。

第6図2・3は宮後遺跡、4～6は諏訪遺跡出土の「宮後タイプ」関連土器である。2・3・5は交互刺突文が施される例である。2・5は交互刺突文が施されない4と同様、口縁部の施文域が上部に押し上げられるものであるが、3は大根磯花例と同じく幅広い区画文を形成している。いずれも頸部以下に地文として縄文が施される^(注6)。

さて、大根磯花例の編年的位置であるが、阿玉台式で言うならばⅡ式からⅢ式の範囲にあるのではないかと思われる。大根磯花遺跡の公表された調査内容では阿玉台式期の遺構調査例はないものの、Ⅱ式からⅢ式の土器はあり、非公表の資料中には遺構の検出も認められているため、本例のような阿玉台式併行期の異系統土器の伴出が、大根磯花遺跡では十分あり得たので



第6図 中期前葉異系統土器の類例 (S=1/8)

はないかと考えておきたい。

本稿をまとめるに当たって、千葉県教育委員会・日立市郷土博物館、塚本師也・萩野谷悟・猪狩俊哉・大内千年・平野 功・荒井世志紀・西川博孝・栗田則久・橋本勝雄・山岡磨由子の各氏をはじめ、多くの方々に御助言、御協力をいただいた。特に塚本氏には本資料を実見していただき、有益なコメントをいただいた。末筆ながら記して皆様に感謝の意を表します。

注1 磯花遺跡が中期の集落であることは、1980年の調査内容をまとめた調査報告書の内容で認識していたが、上谷津遺跡の異名称という認識はこの時点ではなかった。

注2 遺跡名称については、既往のものはそのままとし、それ以外は1989年佐原市教育委員会発行「佐原市内遺跡群発掘調査概報Ⅲ」で記載されているように、遺跡所在地の教育委員会が呼称する大字小字名を組み合わせた大根磯花遺跡とした。

注3 1996年以降、長らく発掘調査は実施されなかったが、2015年度に農地造成に伴い、A・B2地点の合計3,568㎡を対象とした確認調査と、B地点978㎡を対象とした本調査が香取市教育委員会により行われた。同教育委員会 荒井世志紀氏の御教示による。

注4 発掘調査報告書の担当者である横山 仁氏は、第6図1aにより全体を説明しているが、今回、千葉県教育委員会に借用を依頼して1bの展開図を作成し、全体を説明した。

注5 今回、県内出土の「七郎内Ⅱ群土器」については触れなかった。最近、柏市小山台遺跡で明らかに福島県中通り地方、栃木県北半部地域と関連の深い「七郎内Ⅱ群土器」が出土しているという。委細は本号の西川博孝氏の論文を参照されたい。

注6 日立市郷土博物館で実見の機会をいただいた際、第6図5についても実測図に示されている範囲だけではなく、頸部以下底部付近までほぼ全面に地文縄文が施されていることを確認した。

引用・参考文献（年代順）

1974 文化庁文化財部 「全国遺跡地図 12千葉県」

- 1978 千葉県教育庁文化課「千葉県埋蔵文化財発掘調査抄報 昭和50（その2）・51年度」
- 1979 佐原市教育委員会「佐原市埋蔵文化財分布地図－史跡・名勝・天然記念物および埋蔵文化財包蔵地所在地図」
- 1980 日立市教育委員会「日立市諏訪遺跡発掘調査報告書」
- 1981 磯花遺跡調査会「磯花遺跡」
- 1982 (財)福島県文化センター「国営総合農地開発事業母畑地区遺跡発掘調査報告X 七郎地C遺跡・七郎地D遺跡」
- 1984 佐原市発掘調査会磯花遺跡調査団「磯花遺跡Ⅲ」
- 1984 海老沢 稔「茨城県内における縄文中期前半における縄文中期前半の土器様相(2)－諏訪式土器について－」『婆良岐考古』第6号
- 1986 渋谷 貢・荒井世志紀「利根川下流域における縄文時代集落遺跡の一例－佐原市磯花遺跡の第4次調査から－」『史像』No.11
- 1987 佐原市教育委員会「佐原市内遺跡群調査概報」
- 1987 鈴木裕芳「諏訪遺跡出土土器の再検討」『茨城県史研究』第59号
- 1989 佐原市教育委員会「佐原市内遺跡群調査概報Ⅲ」
- 1990 塚本師也「北関東・南東北における中期前半の土器様相－縄文地に有節沈線を施文する土器群について－」『古代』第89号
- 1992 栃木県教育委員会「品川台遺跡」
- 1997 栃木県教育委員会「浄法寺遺跡」
- 2000 青木 司「174 大根磯花遺跡」『千葉県の歴史 資料編 考古1（旧石器・縄文時代）』
- 2002 (財)茨城県教育財団「宮後遺跡1」
- 2003 塚本師也「茨城県北部域に於ける縄文時代中期中葉の土器の一樣相－宮後遺跡の調査成果から－」『領域の研究－阿久津久先生還暦記念論集－』
- 2008 (公財)千葉県教育振興財団「東関東自動車道水戸線酒々井PA埋蔵文化財調査報告書－酒々井町墨古沢遺跡－旧石器・縄文時代編－」
- 2009 塚本師也「茨城県北部における大木7b式期の土器－特に七郎内Ⅱ群土器と所謂スワタイプについて－」『常総台地』16
- 2016 常陸大宮市教育委員会「滝ノ上遺跡Ⅳ」